

第6章

まとめ

第6章 まとめ

昨年度より、文部科学省および国際協力機構（JICA）等と相談し、関係機関の支援を受けて準備してきた農学知的支援ネットワークは、平成21年11月30日の設立総会を経て今年度正式に発足に至った。発足後、会員に対するJICA大学連携情報の提供、ホームページ開設、会員獲得活動等を行い、また、ネットワークが支援した海外調査を踏まえてJST/JICA地球規模課題対応国際科学技術協力事業への応募に至った事例も作った。

私どものこのような活動に対して、平成22年2月25日に開催された文部科学省の第1回国内報告会において、コメンテータから、①リソース/ニーズの情報収集と提供は援助する側と受ける側の双方にとって重要、②ネットワークの活用が大事、③JICAは大学を開発パートナーとし持続的な形で支援をしていきたい、④ネットワークは作っただけに留まらず、集めた情報等も絶えず更新して維持していかないとすぐに役に立たなくなる、⑤文科省のサポートにも限界があるので、今後はネットワーク独自での予算確保の視点が重要、などのご指摘をいただいた。

例えば、目まぐるしく変化している現代の社会に対応していくには情報も絶えず更新する必要があり、そのためにはネットワーク事務局の恒常的な情報収集と集めた情報の整理と会員への発信が求められる。そのようにしなければネットワークの存在意義が疑われる。ネットワークの事務局を預かる者として何れのコメントも真摯に受けとめていきたい。

また、大学間の連携を強化して国際共同研究や留学生や研修員の受入を含む国際科学技術協力に参画していくということも決して容易ではないと考える。ネットワークができれば何かが提供されるという状況ではなく、やはり研究者自らの発意による行動が伴わなければ何も進まないのである。

しかし、大学や研究機関は評価の事情もあり、国際協力に従来よりも興味を示しにくくなり、また、個々の研究者も海外、特に途上国に出て現場で考える機会を持ちにくくなってきている。このような状況の中で、ネットワークの役割とは、海外に出る多くの機会を紹介し、研究者自身がスクラムを組んで予算を獲得し、自らその知と経験を活かして世界の食料安全保障や環境問題等ひいては貧困削減に向けた活動ができるようにファシリテートすることであると認識している。

独自予算を持たないネットワークとしては、当面予算上の措置を受けつつも、JICAとのより強固な連携を視野に入れた活動を通じ、運用経費工面を念頭に置き我が国の農林畜産研究分野の知と経験を国際協力に活かすことを目的とした活動に地道に取り組んでいく所存である。このネットワーク形成の結果、JICA課題別研修（2件）の他、対CARD及び対アフガニスタン支援としての留学生無償の実施やネットワークからの技術的提案についてのオファーが既にJICAからなされており、国際協力イニシアティブによる活動のインパクトの芽が出つつある。これらのインパクトを最大化し、ネットワークの今後の持続的な活動に結びつけるためにも関係機関には引き続きのご支援を、また会員各位には積極的な参加をお願いする次第である。